母・石田敬子を偲んで

横浜市立大学大学院医学研究科 眼科 石原麻美

石田敬子先生 近影

何を書いてよいかわからないというのが今の心境です。母、石田敬子は令和2年11月10日、自分がインターンから定年までを過ごした日本赤十字社医療センター（日赤医療センター）で最期を迎えました。享年92歳でした。母は以前から慢性心不全で入退院を繰り返していましたが、平成30年10月下旬、父の死後1カ月で急に病状が悪化して、日赤医療センターに緊急入院しました。その翌日、循環器医師より「長くてもあと2、3ヵ月でしょう」と母の前で言われて、私は目の前が真っ暗になりました。「オリンピック一緒に見ようねって言ってたのに」と言うと、「興味ないからそんなのいいわ。で、長生きするにはどうしたらいいの?」と余命宣告をされても動じない母でした。安静加療により奇跡的に病状は安定しましたが、数ヵ月後、夕食後におしゃべりをしている最中に倒れ、脳梗塞の診断でICUに運ばれました。なんとか元の病室に戻ることができましたが、言語障害と嚥下障害が残ってしまいました。昨年の夏を過ぎたころから体調が悪化し、とうとう家に帰ることは叶いませんでした。おしゃべりが好きな母でしたので、意思疎通がうまくできなくなってしまったことが一番辛かったと思います。

母は戦後まもなく帝国女子医学薬学専門学校（現・東邦大学医学部）に入学、卒業後は日赤医療センター（当時は日赤中央病院）でのインターンを経て、昭和29年に眼科に入局しました。戦時中に東京第一陸軍病院として使用されていた当時の病院は相当傷んでいたようで、雨漏りがひど

く、ベッドの上で傘をさしている患者さんがいらしたという信じられないような話を聞きました。昭和45年頃に病院を新築する話が出て、欧米の病院の新しい設備やシステムを視察する目的で、両親（当時、父も同じ医局でした）が派遣されることになりました。他の病院の医師たちと共に26人のグループを結成し、ソビエト連邦のモスクワを振り出しに、欧州各国、米国、最後にハワイと、各国の病院や癌センターなどを視察しました。母は持ち前の体力とおしゃべり好きの明るい性格でしっかり楽しんだようです。私は当時小学校1年生、1ヵ月以上も幼い弟と祖父母と寂しく留守番をしていたことが思い出されます。昭和47年11月に新築された日赤医療センターで、母は日赤初の女性の部長となり、平成6年の定年までインターン時代を入れると40年以上、まさに半生を日赤で過ごしました。その後さらに3年ほど嘱託で勤務したのち、私の主人の眼科クリニックの休診日を利用して、「石田先生じゃないとだめ」というサルコイドーシス患者さんたちの診療を数年間、私と一緒にに行いました。母が完全に引退した後は私が引き継いで診ていますが、それこそ何十年來の患者さんばかりですので、母の死を大変悲しんでくれました。

母にサルコイドーシスとの出会いを聞いてみたことがあります。今から60年以上も前、昭和30年代前半のことです。母が診た第1例目は、寛解増悪を繰り返す原因不明の肉芽腫性ぶどう膜炎の方でした。どうもサルコイドーシスという珍しい病気があるらしい、ということで海外の文献

を調べ、内科、皮膚科、病理の先生方に相談し、診断をつけたそうです。その後、紹介されたぶどう膜炎の患者さんたちをサルコイドーシスと診断し、治療して紹介元に返すと、「そんな病気は聞いたことがない」と主治医に言われて、患者さんがまた母の元へ戻ってきてしまったと聞いています。母はサルコイドーシスという疾患の奥の深さに魅了され、きちんと診断して治療することが眼科医としての自分の使命だと感じたそうです。遠方から飛行機や新幹線で定期的に診察を受けに来られる患者さんも少なくありませんでした。母は特に網膜血管炎の病態や病理に興味があったようで、日赤医療センター内科の松井泰夫先生や折津愈先生、病理の武村民子先生たちと一緒に症例をまとめて発表していました。母は眼科分野におけるサルコイドーシス臨床の先駆者の一人といえると思います。

私の一番の思い出は、23年間におよぶ母とのサルコイドーシス学会への参加です。母は「サルコイドーシス研究会」の時代から参加していましたが、私が初めて参加したのは、平成4年の盛岡での学会です。大学病院勤務を辞めて大学院に入学した年で、日赤医療センター眼科のサルコイドーシス症例の血液検体を用いたHLA-DNA解析を、東海大学医学部分子生物学教室で始めていました。「いずれサルコイドーシス学会で発表したらいいから、まず学会に出てみたら」と言われ、軽い気持ちで母についていきました。口演後に繰り広げられる、眼科の学会では見られない熱い討論を目の当たりにして、先生方のサルコイドーシスに対する情熱に圧倒されました。その後、毎年欠かさず二人で参加しました。最初は母が医局の若い女医さんを連れて来たと思われており、聞かれると母は「これ、私のむ・す・め」と答えていました。女医の親子ペアは珍しいのか、そのうちに、「石田先生親子を知らない人はもぐりだね」と言っていたくらい有名(?)になりました。

学会といえばその土地の観光がつきものですが、私たち親子はホテルと会場との往復がほとんどだったように思います。他分野の講演を聞くチャンスはこの学会しかないので大変勉強になりますし、懇親会（写真）では先生方とおしゃべりしながら美味しい郷土料理をいただけるので満足でした。毎年楽しく参加していましたが、平成14年の岡山での学会での出来事です。母は腰が重だるいと言いながら講演を聞いていましたが、終了後、空港に向かおうと

学会懇親会にて：母、私（石原）、大西礼子先生、山口哲生先生、長井苑子先生

したところ、激痛に変わりました。地元の病院の救急に行くか聞いたところ、どうしても東京に帰る、とがんばるので、岡山空港で事情を話し、なんとか後部座席を2つ確保してもらい横にならせてもらいました。冷や汗をかきながら激痛に耐え、羽田空港に到着し、岡山空港からの要請で待機していた救急車ですぐに慶応大学病院に搬送され、尿路結石の診断で入院となりました。

私は「サルコイドーシスの疾患感受性遺伝子の研究」で、第9回千葉保之・本間日臣記念賞をいただきましたが、受賞講演後、「これであなたにサルコを引き継げた気がするわ」と母に言われたことは忘れられません。これで自分の使命は果たせたと思ったのかわかりませんが、その後、地方への移動が難しくなり、残念ながら私一人の学会参加となっていました。それでもサルコイドーシス学会が近づいてくると、「発表の準備はできてるの？」と心配し、出かける朝は「私のことは心配しないでしっかりやってきなさいね。みんなによろしく言ってね」と玄関で見送ってくれたことが思い出されます。

長い間、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

どうぞ、安らかに眠ってください。